

2021年  
1月号

# 今里に誕生した夢と希望を乗せた ベトナム料理店

近鉄今里駅から高架沿いを西に5分ほど歩いたところに、ひと際目を引く鮮やかな黄色のお店。2か月前にオープンしたばかりのベトナム料理店「2000ドン」だ。

お店を運営するのは、6年前にベトナムから来日したミンさん。ベトナムの高校を卒業後、日本の大学で経営を学んできた。日本語も流暢だ。

「そのまま使えるものはなかった」という傷みの激しかったこの場所は、もと喫茶店。大がかりな改修が必要でもここに決めたのは、一目でベトナムの家が目に見えてきたから。真ん中にドアがあり、それを挟むように2つの窓。まさに、こどものころ幾度となく描いてきた家の絵そのものだった。

色は迷わず黄色に塗り替えた。ミンさんの記憶にあるベトナムのお店はどれも黄色だったからだ。店のロゴにも使われている木の葉でできた円錐の笠帽子は、店内にもたくさん飾った。一つ一つ異なる笠の絵はミンさんが描いたもの。少ない資金ながらも、できる限りベトナムを感じられるようにと、工夫が随所に凝らされている。



▲ ベトナムの代表的料理フォー。日本人のお客さんからのオーダーが多いという。



▲ 笑顔が印象的なミンさん。ここ日本でお店を成功させたい、そう願う若き青年は夢と希望に満ちている。

店名にあるドンとはベトナムの通貨単位のこと、2000ドンは日本円にして約10円だ。貧しい家庭で育ったというミンさん。幼い頃のある日、お店で売られていた鉛筆削りが、どうしても欲しくて大泣きしたという。ミンさんの母親は、とうとう2日分の食費に相当する2000ドンでその鉛筆削りを買ってくれた。その時の母親の気持ちを忘れてたくない思いから店名につけたという。

「おじいちゃんになったらベトナムに帰ろうかな」そう話すミンさんの心の原点はいつも、在りし日の家族との思い出が詰まった故郷にある。



▲ マンションの1階にあるお店。店内は異国の香りがする。本格的なベトナム料理に、もうすっかりベトナムを旅しているような気分になる。

2021年  
2月号

# 二人三脚で作る“キンパ”は いつもほんわりあたたか

疎開道路沿いにあるキンパ専門店「Ella Gimhap(エラキンパ)」。  
白壁とレンガの可愛らしい外観が、コリアタウンから鶴橋駅へと向かう人の足を止める。

1年前にここにお店を開いたのは、大長さん親子。  
厨房ではいい匂いが漂い、卵焼き、たくあん、豚キムチ、ソーセージ、ヤンニョムチキンなどの具材がずらりと並んでいる。注文が入ってから、のりを広げ、そこに温かいご飯と具材を乗せると巻き、包丁で輪切りにしてパックに入れる。このスタイルは「お客さんには少し待たせてしまうけど、一番おいしいできたてを食べてほしい」との二人のこだわりからだ。すぐに食べられる形のテイクアウトもできる。手渡されたキンパはほんのりあたたかく、ほおばった口に優しい味が広がる。



▲ 明るい笑顔で接客する大長愛さん。店名の“Ella(エラ)”は、幼少期に一時期韓国で暮らしていた頃の愛さんの呼び名なのだそう。

母の智炎さんが、韓国の友人からキンパの作り方を教わったのはずいぶん前のこと。それ以来、子どもたちの遠足や運動会など特別な日に作ってきた。家庭で愛された味が、そのままお店の味になっている。

ももとは、キムチ屋さんだったというこの場所。キッチンとカウンターを新たにに取り付け、壁紙や床はすべて張り替えた。シンプルな内装の中に、壁にかけられたいくつもの大きな絵が目を引く。



▲ 韓国の“のり巻き”キンパ！  
一番人気の「Ella(エラ)キンパ」！  
他にもチャンジャ、明太キムチ、豚キムチ、ツナマヨなどがある。



智炎さんが大切な友人から譲り受けたというこれらは、絵専門のクリーニングで鮮やかに甦ったのだそう。  
お客さんからの「おいしい」が励みだという二人は、その絵に見守られながら今日もできたてのキンパを提供する。



▲ 注文が入ると、あっという間にできあがっていくキンパ。  
二人の呼吸はぴったりだ。

2021年  
3月号

# 心に描いてきたのは暮らしに 溶け込むような名もなき場所

疎開道路から東へ入ってすぐ、東桃谷小学校グラウンドの向かいに、真新しい木の壁がひと際目立つ建物ができた。日当たりのよい南向きのガラス扉を開けると、大きなウォールナットのテーブルと、それを囲むように一つひとつ表情のちがう椅子が並び、奥にはキッチンが備えられている。無垢の木がふんだんに使われた静かで自然と落ち着く場所だ。

「いたや木材有限会社」の倉庫兼加工場だったこの場所。使われないままに眠っていた木材は壁に張られ、当時の大工さんのメモ書きが残るコンクリートブロックの壁や、様々な樹種(じゅしゅ)の古材を使った天井は当時のまま残されている。



▲ 飾り棚の小物一つひとつに、古きよきものを大事にする大塚さんのこだわりが感じられる。



▲ 車通りの少ない静かな通りに面している。グラウンドで遊ぶ子どもたちの声がBGMのように心地良く聞こえてくる。

この場所では、学校帰りの子どもたちが宿題をしたり、買い物帰りのお年寄りが一休みしたり、近所の人がコーヒーを飲みながら読書したり…そんな空間をイメージしてリノベーションしたと話すのは、この会社の3代目で建築士の大塚典子さん。

大塚さんが幼い頃、会社の事務所には、近所で商売をするおじさんたちが休憩がてらしゃべりに来たり、お茶しに寄ったり、そんな日常の風景があったという。

そんな近所の人々がふらっと立ち寄れる“暮らしの一部”に溶け込むような場所を自分も作りたいと思い続けてきた大塚さん。「これからまちの人と一緒に、どんな場所に育っていくのか、ドキドキするけどワクワクする」と笑顔で話してくれた。



▲ 大塚典子さん。  
子育てを経験する中で、この場所の実現への思いは強くなった。